



令和6年度 福島市民憲章 作文コンクール 作品集

福島市民憲章
推進協議会

福島市民憲章

わたくしたちは、みどりにつつまれた信夫山と清い流れの阿武隈川をもつ福島市民です。

福島市は、地味^{ちみ}豊かなしのぶの里に古くから開けた人情の美しいまちです。

わたくしたちは、平和で、さらに住みよく希望にみちたまちをつくるため、この市民憲章をさだめます。

1. 空^{そら}も水^{みず}もきれいな みどりのまちをつくりましょう。

1. 教育^{きょういく}と文化^{ぶんか}を尊^{たつと}び 希望^{きぼう}に輝^{かがや}くまちをつくりましょう。

1. 親切^{しんせつ}で愛情^{あいじょう}あふれるまちをつくりましょう。

1. きまりをまも^{まも}り、力^{ちから}をあわせて 楽^{たの}しく働^{はたら}けるまちをつくりましょう。

1. こどもからおとしよりまで安全^{あんぜん}で健康なまちをつくりましょう。

昭和 48 年 4 月 1 日制定

福島市民憲章作文コンクール

作品集の発刊に寄せて

「福島市民憲章作文コンクール」は、市民憲章の普及・啓発のため実施しております。福島市内に在籍する中学一年生を対象とする「中学生の部」は、今年度で二十回目の開催となりました。また福島市に居住、もしくは通勤・通学している高校生以上の方を対象に実施している「一般の部」は、今年度で六回目の開催となりました。ご応募いただいた皆さんに心より御礼を申し上げますとともに、本コンクールを通して、市民憲章の精神が、さらに多くの皆さんに浸透される機会となるよう願っております。

さて、ご応募いただいた作品を拝読させていただいたところ、中学生の部では、福島市が持つ豊かな自然や伝統を守り、後世につなげたいという思いがあふれる作品や、家族や地域の方との関わりを振り返り、自分がどれだけ大切にされているかに気づくことができたと内容の作品が特に印象的でした。

また、周囲の人の優しさに触れて、「次は自分が誰かのために親切にあげよう」という決意が込められた作品など、中学生としての自覚が感じられる作品が多く見受けられました。

一般の部では、時の流れとともに、少しずつ変化していく福島市の街なみと自然環境に戸惑いを覚える一方で、過去に体験した個性

的なエピソードを紹介しながら、いつの時代も変わらぬ福島市の魅力と、福島市に対する愛情を表現している作品が目立ちました。

いずれも市民憲章の理念を十分に理解され、ご応募いただいた皆さまの感性が活かされた素晴らしい作品となりました。

是非とも多くの方々にお読みいただき、作品内容に共感いただければ幸いです。

福島市民憲章は、市民全ての幸せと、郷土福島の限らない発展を願いながら、快適で明るく住みよいまちづくりを進めるためのよりどころとして制定されました。今後とも、様々な普及・啓発活動を通して市民憲章の意義を一人でも多くの市民の皆さまに理解していただき、「住んで良かったと、心から思える福島市」の実現を目指していきたいと考えておりますので、ご協力よろしくお願い申し上げます。

結びに、本コンクールの開催にあたり、各学校で作文指導にあたってくださいました先生方をはじめ関係各位に対しまして、心より御礼を申し上げます。

令和七年三月

福島市民憲章推進協議会会長

山 本 和 宏

福島市民憲章作文コンクール表彰式講評

福島市民憲章作文コンクールは平成十七年度から始まり、今年度二十回目を迎えました。市内の中学校一年生と一般の方を対象に作品を募集し、毎年多くの作品が寄せられてきました。市民憲章に寄せる思いを描いた作文から、今年も審査をとおして中学生の瑞々しい感性にふれると共に、一般の方たちの大人ならではの視点と出会うことができました。

中学生の作文を読むと、今年もほとんどの中学生がこのコンクールをきっかけにして初めて福島市民憲章と出会っていることがわかります。しかし、どの作文にも共通していたのは、市民憲章について考えることで、自分の生活の中に市民憲章の精神があったことやその価値に気づき、それを守っていこうとする意思が生まれているということです。

西信中学校の佐藤光莉さんは、第一の条文をきっかけに、改めて自分の地域を見つめ直しました。自分の住むきれいな町が、実は当たり前にあつたのではなく、日頃からの地域の人々の思いがあつてこそだと気づきます。どの作文にも、皆さんの中にあつた記憶や思い出が市民憲章の条文と結びつき、福島市の素晴らしさとして再確認されていく、その過程が中学生らしい感性と表現で書かれています。

そして、市民憲章を通し改めて福島市の素晴らしさを実感したことで、これを守り継いでいきたいという思いが生まれています。附

属中学校の守谷知佳さんの「何百年先の未来へ残していきたい」岳陽中学校の東海林花帆さんの「未来の福島は『今』を生きている私たちの想いで変わっていく」という言葉が印象的です。中学一年生の中にも、すでに市民憲章の精神は芽生え、育っているということがよくわかる作文ばかりでした。

一方、一般の方の作文は、市民憲章との向き合い方も中学生とは異なり、大人ならではの視点を感じました。切り口は様々ですが、共通していたのは、この市民憲章があつてこそこの福島、これからも「守りたい」福島への皆さん一人一人の熱い思いでした。

この作文コンクールは、市民憲章の精神が日常生活やまちづくりに生かされることを期待して行われています。今年の作文も、その期待に十分応えるものであつたと感じました。そしてまた皆さんの作文を通して、多くの市民が改めて福島市民憲章について考え、福島の素晴らしさに気づき、きつと同じ思いを持ってくれるに違いありません。そのような作文を応募してくださった皆さんに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和七年三月

福島市民憲章推進協議会委員

福島地区中学校長会 福島市立西信中学校長

吉 田 牧 子

令和 6 年 度
福島市民憲章作文コンクール
中学生の部



市の木 ケヤキ

目次

◆金賞

空も水もきれいな福島市へ

福島市立西信中学校

佐藤光莉……………1

◆銀賞

『うつくしま』を誇れるように
残したい風景

福島市立岳陽中学校
福島大学附属中学校

東海林花帆……………2
守谷知佳……………3

◆銅賞

笑顔と挨拶あふれる未来へ
福島市民憲章と未来
自然豊かな福島

福島市立福島第三中学校
福島市立清水中学校
福島大学附属中学校

南川依吹……………4
久米志奈……………5
小針莉子……………6

◆佳作

私の好きな福島市
働きやすい社会を作るために
安全で住みよいまちにするために
愛情のまち、渡利のまち
より良い福島にするために
つなげ！福島市のバトン

福島市立福島第三中学校
福島市立福島第四中学校
福島市立福島第四中学校
福島市立渡利中学校
福島市立蓬萊中学校
福島市立清水中学校

宮本夢叶……………7
笹川歩夢……………8
齋藤遙香……………9
小川友理奈……………10
三瓶那奈美……………11
原田祐那……………12

親切に必要なこと
 私もこうなりたい。
 もっと知りたい
 ピンクおじさんと福島のみどり
 親 切
 私のまちの元気なあいさつ
 あたたかい福島
 福島市民憲章を知って
 私達は今、何をすべきだろう
 あいさつから始まる優しい町

福島市立信陵中学校	佐藤穂香	13
福島市立北信中学校	齋藤希音	14
福島市立北信中学校	藤川紗弥	15
福島市立西信中学校	斉藤乃生	16
福島市立大鳥中学校	佐藤璃子	17
福島市立大鳥中学校	横山稀子	18
福島市立平野中学校	関根美徳	19
福島市立野田中学校	鈴木 諒	20
福島市立吾妻中学校	稲村わか	21
福島大学附属中学校	小針茉莉子	22

金賞

「空も水もきれいな福島市へ」

福島市立西信中学校

佐藤 光莉

「空も水もきれいなみどりのまち」は福島市民憲章の第一の条文です。この条文を目にしたとき、福島市民が一丸となって目指していかれたらとても素敵なことだと思いました。なぜなら他の条文と違って目に見える事だからです。

私の住んでいる佐原地区は、山に囲まれ自然が豊かで、あたりまえのように「空も水もきれいなみどりのまち」があります。小学生の時の総合学習の授業では、田植えや稲刈りを体験し、サツマイモなどの野菜を育て収穫したりしました。また、みどりの少年団の活動では学校の花壇に花を植えるなど、佐原の自然やみどりにふれる活動や体験を沢山してきました。そしていつも地域のボランティアの方々から色々なことを教えてもらいました。地域の方々には皆、自分の住んでいる佐原や佐原の自然が好き

ということが伝わってきて、私も自分の住んでいる地区が大好きになりました。

ある日、近くのあづま総合運動公園でイベントがありました。普段、佐原人が少ないので沢山の人が来てくれるのは大変うれしいと思っていました。ところが、イベントの翌日、自宅近くの自動販売機の脇のゴミ箱には、入りきらなかったペットボトルや缶、ゴミがあふれかえり、歩道にもゴミが多く落ちていました。私は自分の家を汚されたような気持ちになり、気分がよいものではありませんでした。このままでは佐原の自然が汚されてしまうと感じました。

自分でも何かできることはないかと思い、地域の清掃活動のボランティアに母と参加しました。大好きな佐原からゴミが減っていくのはとても気持ちがいいものでした。今年の夏休みにも地域の清掃活動に参加しました。今年はゴミがとても少なくなれしく思いました。

地域の活動に参加して感じたことは、佐原地区の住民は皆協力的だということです。地区の交差点脇にある花壇には、春に

はチューリップ、夏にはサルビアとマリーゴールド、秋・冬にはパンジーなど四季折々の花が咲きます。その花は町内会で毎月二回、早朝に集まって手入れをしていることを知りました。あたりまえにある佐原のきれいな町は、あたりまえにあったのではなく地域の方々が常日頃から町をきれいにしていくこう、自然を大切にしようという気持ちで過ごしているから、空も水もきれいな緑のまちが続いているのだと思います。

市民憲章は、市での目標ですが、まずは自分の住んでいる身近なところから、ひとりひとりが心がけていくことで「空も水もきれいなみどりのまち」が福島市全体に広がると思います。私はこれからも地域の活動に積極的に参加し、大好きな佐原をそして福島市を、素敵な町にしていきたいです。

銀賞

「『うつくしま』を誇れるように」

福島市立岳陽中学校

東海林 花帆

去年の春、気持ちが良いほど晴れた福島市で、私たちは「古閑裕而」のスポーツショー行進曲を演奏した。新型コロナウイルスの影響で、市街地で鼓笛パレードが開催されるのは、四年ぶりのことだった。

「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう。」。私は、この福島市民憲章の条文を読んで、一年前の鼓笛パレードの日のことを思い出した。

その日の福島市の空は、清々しい爽やかな青色で、いつまでも見ていたいと思っていたのを覚えている。周りを見渡すと、山々に囲まれていて、緑が溢れていることを実感した。この「古閑裕而」のふるさとで演奏ができることへの喜びを、全身で感じた最高の思い出だった。では、この美しい福島市は、いつまで見ることができるようだろうか。終わりがああるなんて考えたくもない

が、問題があることも事実だ。その問題は、ごみ問題である。

近年、福島市にとどまらず、福島県はごみ問題が重要視されている。小学五年生の頃、調べ学習の時間に福島県のごみ問題について調べたことがあり、私はその検索結果に衝撃を受けた。それは「福島県のごみの排出量が全国二位」というものだった。こんな全国二位は誇らしくない。自然が多く、空気がおいしい福島県ですつと過ごしてきて、その福島をずっと見ていたから、信じられなかった。このごみ問題の記事を読んで、

「十年後、三十年後、五十年後も、今のよう美しい福島を見ることができるようかな。」そう考えるようになった。

今、福島県が抱えているごみ問題は、世界が直面している環境問題へと繋がる。ごみを燃やす際に発生する、二酸化炭素が「地球温暖化」を促進させるのだ。そうすると、私の大好物である、甘みがあつておいしい「福島の桃」や、吾妻山・猪苗代湖などの「豊かな自然」にまで被害が及んでしまうだろう。

私は、この問題を防ぐために、そしていつまでも「空も水もきれいなみどりのまち」を守るためには、福島県民の「しすぎない」意識が必要だと感じた。「買いすぎない・作りすぎない・残しすぎない」。これらは、そもそものごみの量を減らす策として、大切な行動だ。他にも取り組めることはたくさんあるが、「塵も積もれば山となる」という言葉があるように、少しの意識は一人ひとりが持つことによって、大きなものへと変わるものだと思う。今、大事なものは、意識して行動する力だ。

未来の福島は「今」を生きている、私たちの想いで変わっていく。数十年後も、美しい福島「うつくしま」を誇りに思えるように、がんばって、福島。

銀賞

「残したい風景」

福島大学附属中学校

守 谷 知 佳

福島市は盆地のため見渡すかぎり山に囲まれています。また、花見山や信夫山、小鳥の森など豊かな自然を身近に楽しめる場所が多くあります。

信夫山公園は開園百五十周年を迎えました。私は家族とよく信夫山公園に行きます。ブランコに乗っていると、福島市の町並みやその奥にそびえる吾妻連峰が見えます。公園には夏らしく今年もうるさいほどセミが鳴いています。噴水も見えていてとても心が和みます。その信夫山公園の一角に市民憲章の条文がかかげられています。その中のひとつに『空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう。』の一文があります。まさに今の福島市の姿があるのは、この条文を市民が守り継いできたおかげだと思います。

一方、福島市の美しい景観が損なわれる

残念な出来事としてメガソーラーの設置があります。広範囲に森林が伐採され、山肌が露出し、何だかとても異様な光景になってしまいました。ニュースでは災害の危険性があると言っており大変心配です。災害が起きてしまうと、今ある残された自然環境も巻き込まれる様になり果ててしまうと思います。私は美しい自然を残すために、今ある自然を壊すことはしないほうが良いと強く思います。

森林の役割は私たちに美しさといやしを与えてくれるだけではありません。福島市はモンドセレクションを受賞するほどおいしい水の産地です。このおいしい水を守るため、水源保全活動として森林環境整備がとても重要だそうです。このように森林には水をたくわえて、水をきれいに浄化してくれる働きがあります。福島市のきれいな水を守るために森林環境を守っていくことがとても大切だと思います。

私たちが生きるために吸う酸素も森林活動のおかげで与えられるものです。森林は二酸化炭素を減らし、大気に放たず固定し、温暖化を抑制してくれています。福島市は

周りを山々に囲まれており、そのおかげで空気もきれいなのだと思います。私は森林環境を大切にするので、私たちの暮らしも豊かになるのだと思います。

信夫山以外にも私の好きな素敵な所がたくさんあります。花見山は春に花々が満開になり、まさに日本の桃源郷です。小鳥の森には福島市の里山環境が保存され、動植物がたくさんあり、自然豊かな原風景が残されています。私は福島市の自然はとても豊かだと改めて思いました。

私は今自分が見ている福島市の美しく豊かな自然環境をこれから先もずっと眺められると嬉しいです。そのためには、福島市の自然をこれ以上壊すことなく、何十年、何百年先の未来へ残していきたいと思います。

銅賞

「笑顔と挨拶あふれる未来へ」

福島市立福島第三中学校

南川 依吹

「支え合う 笑顔とあいさつ 地域の輪」
これは、私が小学六年生の時に児童標語コンクールで最優秀賞をいただいた標語です。

小学校の登下校時には、地域の方々が見守り隊」として、私たちが安心、安全に通学できるよう毎日、通学路に立って見守ってくださいました。

「おはようございます」

「行ってらっしゃい」

「こんにちは」

「おかえり」

この挨拶と笑顔のやり取りは、当たり前のようにあった毎日の光景です。その時のほっとするような安心感や優しい気持ち地域にもっともっと広がって欲しいという思いや、日頃から挨拶や笑顔が行き交うことが地域を明るくし、支え合うものだとい

う思いを標語にしました。

春から中学生になり、小学生の時のように地域の方々と挨拶を交わすことは少なくなりました。

先日、部活帰りにバスを待っている間、近くにいたお年寄りの方に声をかけられることがありました。

「今、学校終わったのかい？ 気をつけてね。」最初は驚きましたが、だんだんと薄暗くなり心細くなっていったところだったので、声をかけてもらい、ほっとしたこと覚えています。もしかしたら、私が一人でバス停に立っていたのを心配して声をかけてくれたのではないかと思いました。

別の日には、同じバス停で乗降口に迷っていた女性から声をかけられ、乗降の場所を伝えると、

「ありがとうございます。」

と笑顔でお礼をされ、私もうれしい気持ちになりました。

普段の何気ない挨拶や笑顔に元気や安心をもらったり、心細い時や困った時に声をかけてもらったりすることで、救われることもたくさんあると思います。

災害時の救助や避難などには、普段の近所付き合いが力を発揮すると聞いたことがあります。また、見守り隊のように地域の目が防犯の役割を果たすこともあると思います。

普段から笑顔や挨拶を交わしたり、声をかけ合ったりすることで地域のつながりは、さらに強くなり、そして支え合うものになると思います。

現在、私は生活委員として挨拶運動に取り組んでいます。みなさんの一日が気持ちよく始められるよう笑顔で挨拶することを心がけています。笑顔と挨拶の輪が校内から、そして地域に広がっていくとうれしいです。

誰もが安心して暮らすことのできる笑顔と挨拶があふれる未来にしていきたいです。

銅賞

「福島市民憲章と未来」

福島市立清水中学校

久米 志奈

私は、福島市民憲章について考えました。福島市民憲章について考えようとすると、まず頭に浮かんだことは「福島市民憲章って何だろう？」ということでした。市民憲章は、まちの人たちが心がけなければならぬ大切なものや、みんなで守っていくべきことです。

福島市民憲章も福島市のみんなが守り、実行していかなければならないルールです。そして、そのルールがどれだけ生活に影響を与え、より良い社会を築くために大切なものか、私たち中学生にも理解することがとても重要です。

福島市民憲章は、福島市に住む全ての人々が幸せに暮らせるように作られたものです。その内容は、例えば「市民としての誇りを持ち、協力してまちを良くすること」や「教育や文化、スポーツを通じて自分を

高め、人々と共に生きること」など、私たちが日々の生活で大切にすべきことが書いてあります。

まず、「市民としての誇りを持ち、協力してまちを良くすること」に関して考えました。福島市で生まれ育った私たちにとって、この町をもっと明るく、楽しい場所にするのはとても大事です。例えば、道路や公園の清掃活動に参加することや、地域のイベントに積極的に参加することが挙げられます。私たち中学生でも、周りのみんなが気持ちよく過ごせる環境作りに貢献することはたくさんあります。ゴミ拾いや、挨拶運動、友達を助けたりなど、小さなことから始められます。

次に、「教育や文化、スポーツを通じて自分を高め、人々と共に生きること」に関して考えました。学校の勉強や部活動、地域の行事に参加することを通して、私たちはたくさんのことを学び、成長していきます。友達と一緒に頑張ることで、おたがいを尊重し、助け合うことの大切さを知ることができます。スポーツでは勝敗を越えてフェアプレー精神を学び、文化活動では他

人の意見や感性を理解し合う力が養われます。

福島市民憲章は私たちが豊かで安心できる生活を送るための指針です。その中には、まちを良くするための協力、教育や文化、スポーツを通じた自己成長、そして助け合いの心など、大切な教えが詰まっています。これらを日々の生活で実践し、福島市をもっと素晴らしいまちにするために頑張りたいと思います。市民憲章が示す道をしっかりと歩んでいけるよう、自分自身も成長し、みんなと一緒に福島市を明るく元氣なまちにしていきたいです。

銅賞

「自然豊かな福島」

福島大学附属中学校

小針 莉子

「福島県は田舎で、遊ぶところもあまりなく、楽しくないな。」

以前の私はこう思っていました。長期の休みに都会に遊びに行くと、楽しい施設がたくさんあり、ここに住んでいる人たちがうらやましいなど感じることもありました。

私が小学二年生の終わり頃に、新型コロナウイルス感染症が流行しました。当時は、新型コロナウイルス感染についてわかっていないこともたくさんあり、パンデミックを避けるために小学校は休校になりました。自分たちの健康のために必要なことであるとわかってはいましたが、ずっと家にいるだけの生活はとてもつまらず、姉妹でケンカすることが多くなりました。三密を避けて行動することが求められ、当時はマンションに住んでおり家でできる運動も限られていたため、ストレスを感じることが多かったと思

います。そんな私たち姉妹のため、両親があづま運動公園に連れて行ってくれました。久しぶりに自然の中でゆっくり歩き、深呼吸をすると、それだけでとてもリラックスできました。そしてそれまであたり前に感じていた自然に恵まれた福島市の環境のありがたさに気づくことができました。その後も何度かあづま運動公園に行き、ただ歩いたり走ったり、自転車やスケボーのような遊具で遊んだりしました。休校期間中、家で過ごし友達と会えない日々が続きましたが心も元気に乗り越えられたのは、福島市の自然の中で過ごす時間があつたからだと思います。

春には桜を見て、夏には福島で作られた甘い桃を食べ、秋には黄色に色づいたイチョウ並木の下を歩き、おいしいリンゴや梨を楽しんで、冬には雪で遊ぶ、四季折々の楽しみを見つけ過ごすことのすばらしさを福島市は教えてくれることに気づきました。

中学生になり、私は市内に市民憲章というものがあることを知りました。五項目ある市民憲章のうち私は「空も水もきれいな

みどりのまちをつくりましょう。」という項目が心に残りました。コロナ禍で気分が落ち込んでいるとき、福島市の自然のすばらしさを感じて元気になったことを思い出したからです。

私はこの福島市民憲章を通して、福島市の素晴らしいところを再確認することができました。今私は、自然の多い福島市に住んでいることを誇りに思っています。これまでは、周りの大人の人たちが、意識し、守ってくれたこの自然を今度は自分たちも守り、そして次世代にもつなげていきたいです。例えば、ポイ捨てをされているゴミを拾い、街をよりきれいにしたりフリードrossを減らすことにより、ゴミの排出量を少なくするなど小さなことから自分ができることを日々考えていきたいと思います。

佳作

「私の好きな福島市」

福島市立福島第三中学校

宮 本 夢 叶

私は、「福島市民憲章」というものを今回初めて知りました。五つの内容の中で特に気になったものは、「空も水もきれいなみどりのまち」です。私の住んでいる地域は、小鳥の森の近くです。自然豊かで、鳥のさえずりで毎朝起きます。阿武隈川の近くで、冬には白鳥も来ます。

小鳥の森を家族で散歩すると、木がところどころで切られています。ネイチャーセンターの管理をしている人が、自然の中の生態系をくずさないように、切る木を選んで切っていると聞きました。そして、山の斜面や遊歩道に木くずの道があり、歩きやすいのはもちろん、山から採ったものは山へ返しているのだなと思いました。とても空気がキレイで、木のおいと鳥の鳴き声がすてきで、私の大好きな場所です。

私の好きな場所のもう一つに信夫山があ

ります。ここは、すごく空がきれいに見える場所で、夜景はもちろん、日中も福島市内が一望できます。途中には、湧き水が流れている所もあり、福島市の中心にあるのに自然があふれているところが好きです。

そんな私の好きな場所も、昔から住んできた市民たちによって、守られてきたのかと思うと感謝の気持ちがあふれてきます。誰かが汚してしまったら、この景色は見れなかったのかと思うと、これから先、汚さず、未来にも残していかなければと思います。そのために私が、できる事は、何かあるかな？と考えていたら、祖母から、「自然を好きになれば、答えは見つかるかもしれないよ？」と言われました。「自然は好き。」でも今度は、「自然」って何だろう？と思いました。

自然には、昔からふれてきたと思っています。祖母の家は、畑で野菜をつくっていたり、お米もつくっているの、田植えや稲刈りなど、小さい頃から手伝ってききました。おいしい野菜やお米をつくるのに、人の手がいっぱい必要です。畑を耕す事や、田んぼの草をとる事。いろいろな手が加

わって、おいしい「自然」はほっておいたら、ダメなもの。という事に気づかれました。だから、祖母の「自然を好きになれば、答えは見える」と言っていた事への私の答えは、「人が大切にしてきた」が重要なかもしれないと思いました。そんな「人が大切にしてきた」この福島市は、とても「大切な場所」だと思います。

最後に、あたり前のように感じていたこの土地が、まさに市民憲章の「空も水もきれいなみどりのまち」で、人々によって大切につながれてきた景色だと思うと、いつもよりきれいに見えました。

佳作

「働きやすい社会を作るために」

福島市立福島第四中学校

笹川 歩 夢

僕は初めて福島市民憲章を読みました。僕が特に気になったことは、「きまりを守り、力をあわせて楽しく働けるまちをつくりましょう。」です。

今年の四月から僕は、中学に入学しました。中学に入学すると、小学校とは違い、生徒手帳に記入してある、規則があります。「小学校のときにはなかったのに、守る必要があるのだろうか、守らなくても良いのではないのか。」と、思いました。「頭はつや服装の指定が、なぜあるのだろうか。」と不思議に思い母に聞いてみました。母に聞くと、「それは、社会に出るための準備だからだよ。集団で過ごすためには、ルールがないと、好き勝手なことをしてしまう人もいるかもしれない。それは、みんな協力も出来ないし、十分な結果がだせないからだよ。」と、教えてもらいました。母

は、保育士です。母の働いてる保育園にも、子供達に守って欲しい「きまり」があるそうです。例えば、小さなことでは、「友達と楽しく過ごす。」「友達に嫌なことを言わない。」等があるそうです。小さい時から、僕たちは、知らずのうちに、きまりを守ること楽しく過ごせることを、身につけていたんだなと感じました。

僕には将来の夢がたくさんあります。しかし、ニュースを見ていると、パワーハラスメントや、不適切なことを行い解こ、といったニュースが流れてくることが多くなったように感じます。これから、社会人になろうとしている、僕たちにとっては不安でしかありません。しかし、市民憲章にある、「きまりを守り、力をあわせて楽しく働けるまち」を実現することで、このような暗いニュースが少なくなり、楽しく働くことが出来るようになるのではないか、と思いました。小さいうちから、ルールを守る大切さを知り、友達や、周りの人たちと協力することで成し遂げられることを体験することで自信につながり、より楽しく仕事が出来るとは無いかと思いました。

これからは、僕達が大人になり、より、福島市を活性化した市にしていかなければと思います。そのためには、小さい時から、きまりを守る大切さを知り、周りの人たちと協力して成し遂げられる力を身につけていかなければと思います。楽しく働けるためにも、ルールの大切さについて、みんなに伝えていこうと思います。

佳作

「安全で住みよいまちに

するために」

福島市立福島第四中学校

齋藤 遙 香

みなさんは、自転車に乗る時にヘルメットを着用していますか。私は移動距離の長さによって着用する時としない時があり、普段は着用しないことが多いです。

自転車の乗車時のヘルメット着用が努力義務化され一年になりますが、町で見かける人達の大半は何も被らず運転をしていて、中には携帯で話しながら走っている人もいます。

法の改正前と後の変化において疑問を感じ調べてみることにしました。

二〇二三年七月の着用率の調査で全国平均は十三・五%、福島県は四十四位の四・三%と低く、東北地方は五県が十%以下という状況に驚きました。年代別では九歳以下が最も高く、中学生は次に高い数値でしたが高齢者の着用が一割なのは非常に残念

に思います。

自転車の交通事故では頭部が致命傷となり死亡する割合が最も多く、非着用者は着用者の約二・四倍も頭部が致命傷になる割合が上がるそうです。

「福島市民憲章」は市民の幸せと郷土発展を願い、住みよいまちづくりを進めるための心がまえであると知り、「面倒くさい」と着用せず安全を損なう行いは改めるべきであり、五つの条文の実現へと利己的ではなく、市民の一員である自覚と責任をもって、行動していきたいと思います。

安全性を高めるため、技術開発や人工知能の導入などで安全装置が年々進歩している今ですが、設備や機器に依存するばかりでは健康で安全なまちにはなれないと思います。知らされる経験をしました。

母の車が駐車中に制御不能で衝突事故を起こしたのです。一瞬の出来事でしたが、その時の衝撃は忘れられません。怪我もなく自損事故で済みましたが、新車で安全装置が充実しているのになぜと信じられませんでした。

それからは、装備等に依存し過ぎると、

慢心から事故などの危険性が逆に高まるのではと強く思うようになりました。何事も「必ずするはず」とは限らないのです。

一人一人が周囲に気を配り、思いやりをもって譲り合う行動をする意識が高まれば、住みよいまちへとなっていくのではないのでしょうか。

日常生活の中で、快適で安全な社会へとつながる行動を少しずつ出来ることから続けていきたいです。まずは自転車でのヘルメット着用を広めることから始めていきます。

佳作

「愛情のまち、渡利のまち」

福島市立渡利中学校

小川 友理奈

「いつてらっしゃい。」「いつてきます。」
親しい人でも、家族でもない人とのこのやりとりは、私の心の中をやさしく温めてくれました。

私が最初に福島市民憲章を読んだとき、花見山の所に立って、笑顔で観光客をむかえているボランティアの方が目に浮かびました。私が小さい時となにも変わらない優しい笑顔で声をかけてくれるボランティアの方を見ると、今年も春がやってきたなと思えるのでした。「大丈夫かい。疲れたね。」
「気をつけて登ってきてね。いつてらっしゃい。」花見山の色とりどりの花をバックに、風にふかれて伝わる元気な声は、私の心の中に、いつでもいきいきと残っています。
他にも言われたことはないかなと考えていると、小学校の頃の登下校で自然に毎日の生活にとけこんでいたあいさつを思い出

しました。通学路の中で警備員の姿をして毎日登校している小学生に向かって優しくあいさつしている方がいました。「いつてらっしゃい。」「いつてきます。」毎朝このあいさつをする、今日の学校への不安や心のもやもやが少し軽くなって、心が温かくなるのでした。生活にとけこんで、あまり意識していなかったこのあいさつも、今思い返すと私の心に優しい影響を与えてくれたのだなと感じました。他にも昇降口の前に立ってどんな日でもあいさつをしていた小学校の校長先生、幼稚園の時に友達と帰っている際、優しい目線ではえんでくれたご近所の方など、たくさんの人に支えられて育ってきたことを福島市民憲章を読んで改めて実感しました。

私は、この渡利のまちの人たちはみんな心が優しいと思います。子供もお年よりもみんな関係なく、あいさつする、またはあいさつされればあいさつを返す人が多いと思います。渡利のまちは山や川などの自然が多く、店が少ないので、なにもない田舎だと思っている人も少なくないかもしれません。実際に私も小学三年生ごろまでは渡

利よりも、駅前や仙台などの都会の方が住んでいて楽しそうだなと考えていました。しかし、渡利の店の親しみを感ずる優しい店員さんや、歩いていると話しかけてくれるおばあさんの温かさを感じている間に渡利の事がどんどん好きになっていきました。緑豊かだからこそ、観光地を守るために作られたご近所同士、町民同士の団結力。私は福島市民憲章の一つ「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」を守っていくには、今渡利にある団結力を壊さないように維持していく、これが大切なのかなと考えました。どうしても進学していくにつれて、渡利から出ないといけないことも、もちろんあると思います。でも、その時も愛情を感じるまち、渡利のまちで学んだ人の温かさを忘れずに、生きていくようにしたいです。

佳作

「より良い福島にするために」

福島市立蓬萊中学校

三 瓶 那奈美

「福島市民憲章ってなんだろう。」

私がコンクールの説明の紙を見て最初に思ったことです。説明を読んでも昭和四十八年からあるもので今年で五十一年目を迎えていることが分かり、私はすごく驚きました。なぜならこんなに前からあるもののなかに初めて知るもので聞いたことすら無かったからです。そこで蓬萊町に当てはめて考えてみました。

私が住む蓬萊町は、緑が豊かで住宅街が多い町です。しかし、地域の人との交流が少なく近所の人でも話したことがない人が多いです。そこで、私は「福島市民憲章」のなかの「親切で愛情あふれるまち」になれば良いと思い、課題を考えてみました。

私の両親は、東日本大震災の影響で福島市に引っ越してきました。両親が住んでいた飯舘村にある家に帰ると、近所の人は

「おかえり」

と言ってくれます。そう言ってもらうと、とても嬉しくなります。蓬萊町も住んでいる人どうしで仲良くなれると良いと思い、自分にできることを二つ考えました。

一つ目は、班で行っているイベントに積極的に参加することです。今までは、「子供」ということを理由に参加をしていませんでした。しかし、子供でも同じ地域に住んでいる住民の一人として、これからは積極的に参加して、班の方との交流を深めていきたいです。

二つ目は、あいさつをすることです。なぜなら、あいさつは仲良くなるきっかけになると思ったからです。近所の人なら、会う機会も多いと思います。あいさつをすることを続けていればお互いのことを認識できるのです、少しずつ仲良くなれると考えました。あいさつは小さなことだけれど、それを続けて、少しずつ仲良くなりたいです。

蓬萊町のことを考えていたら、「福島市民憲章」が作られた意味も理解できた気がします。五十年前に作られたものだけれど、まだ達成できていないことがたくさんあることも分かり、少しずつ達成できたら良いと思いました。

その時私は、中学生がこのコンクールに参加する意味に気づくことができました。きっとこのコンクールに参加することで、「福島市民憲章」について知ってもらい、自分が住んでいる福島市について考えてほしいと思ったのではないかと思いました。

私が「福島市民憲章」について考えたことはこのようなことです。「福島市民憲章」がなくてもいいような市になることが一番良いと思います。そうするためには、福島市に住んでいる人、一人一人が福島市のことを考える必要があると思いました。私は、今回考えたことを実践したいと思います。

佳作

「つなげ！福島市のバトン」

福島市立清水中学校

原 田 祐 那

みなさんは福島市民憲章を読んだことがあるでしょうか。私が初めて福島市民憲章に出会ったのは幼稚園児の頃でした。幼稚園児の頃は、公園の看板にあるのを何気なく読んでいただけでした。しかし中学生になった今、福島市民憲章を改めて読んで感じたことがいくつかありました。

特に印象深く感じたのは二つあります。一つ目は「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」という部分です。この部分を読み今まで当たり前だと思っていた福島市の良さを改めてすごいことだなと感じました。

私は、今まで野菜や果物などまわりの人におすそわけしてもらうのが当たり前のことなんだと思っていました。しかし母の、「野菜や果物のおすそわけなんて前住んでいた所はなかったよ。」

と言う話を聞いて当たり前だと思っていたことがけつしてそうではないことに気が付きました。

学校の登下校の時も会ったら必ず「おはよう。」と近所の方などがあいさつしてくれます。福島市民は福島市民憲章を実践できていると感じます。

二つ目は、「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう。」という部分です。私はこの部分については良い所と課題があるなと思います。福島市は信夫山や阿武隈川などたくさん美しい自然に恵まれています。そのおかげで、福島はももやさくらんぼ、ぶどうになしなどたくさんフルーツが盛んです。この自慢のフルーツあふれる福島市は後世にも受けついでいきたいです。

でも課題だと感じているのはゴミ問題についてです。なんと福島県はゴミの排出量が全国でワースト二位。そして福島市はワースト十三位だそうです。どちらにしても全国的にはとても多い結果になっています。そしてそのゴミの中でも三十八・四パーセントが生ゴミでそのうちの八・一パーセ

ントがなんと食品ロスなのだそうです。今後このゴミ問題は未来の福島市にとって、とても重要な問題になってくると思います。ですから、私達にもできるようなゴミを少なくする方法をできる限り実践していきたいと思います。

この福島市は、私達の先輩方が福島市民憲章の内容を当たり前のこととして行動してくてくれたからこそ、「親切で愛情あふれるまち」そして「空も水もきれいなみどりのまち」という福島市ができてきているのだと思います。先輩方から引き継いだ「やさしさ」や「自然を守ること」を私達がバトンとして後世につなげていきたいと思っています。

佳作

「親切に必要なこと」

福島市立信陵中学校

佐藤 穂香

福島市民憲章。今日、この作文を書くまで、意識したことなかったし、どんなものなのかもよく知らなかった。自分の経験と照らし合わせながら憲章を見てみると、「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」というものがあって、あるできごとを思い出した。

小学校六年生のときの始業式だっただろうか。二年生の男の子が、近所に住む目の不自由な方が困っていたので、自分から声をかけ家まで送り届けるといふ思いやりのある行動をし、「福島市小さな善行表彰式」で表彰された。私も時々、白杖を使って歩いて大変そうな人を見かけるが、気をつけるだけで実際に声をかけて送る勇氣はなかったのだ、とても驚いた。自分より年下なのに、困っている人に声をかける勇氣と、自宅まで送り届ける思いやりの気持ちに感

心したのをはっきり覚えていた。同時に、それに比べて自分は何も行動できていないと、自分を惨めに思った。

この経験を思い返して、みんなが親切な思いやりのある行動を進んでできるには、何が必要なのか考えた。私が親切な行動を進んで行うことができないのはなぜなのか。それは、「勇氣」がないからだ。

勇氣を出して行動するにはどうすればよいだろうか。私は、「自分の行動が何につながるのか」を考えることだと思う。

たとえば、重い荷物を持って歩いている年配の方がいて、自分が荷物を持って手伝えばどんないいことがあるだろう。その方が重さに耐えられなくて転んでしまったりする危険を防ぐことができる。そして、自分も相手とコミュニケーションをとることができ、和やかな気持ちになることができる。そんなメリットがあると知ったら、一歩踏み出して行動してみようと思えるのではないだろうか。

もちろん、親切は、勇氣を出して踏み出すだけではない。「小さな親切」、「だれにでもできる親切」もあるだろう。福島市民

の、思いやりの気持ちから小さな親切が生まれ、小さな親切が積み重なることで、自然と親切な行動がたくさんになって、愛情あふれる福島市になっていくのではないだろうか。

そんな福島市にこうけんできるように、私も思いやりの気持ちを大切に、「小さな親切」を積み重ねていきたい。

佳作

「私もこうなりたい。」

福島市立北信中学校

齋藤 希音

「大丈夫ですか。」

スーパーから家に帰る時、その言葉が聞こえた。私の歩いている場所より少し前におばあさんがいた。私にはつかれているように見えたが声はかけなかった。様子を見ながら歩いていると、近くにいたお姉さんがおばあさんに話かけた。知り合いかと一瞬思っただけ、そうではなかった。するとお姉さんが

「大じょうぶですか。」

とおばあさんに聞いた。それからお姉さんはおばあさんをイスにすわらせ、

「ちょっと待っていてください。」

と言って走ってどこかに行ってしまった。そしてお姉さんはもどってきた。お姉さんの手には水と保冷剤があった。少し休けいするとおばあさんはすっかり元気になってお姉さんに

「ありがとうございます。」

と言って去っていった。

「親切で愛情あふれるまち」人に親切にする事は当たり前だが実行するのは難しい。でも、私は親切な人をよく見かけける。お年よりの方に席をゆずったりする人もいる。ただスマホを見てたりしてお年よりの方に気づかない人だっている。私は実体験をふまえて分かったことがある。それは、親切にすると、お互いが笑顔になること。親切にする人がいなくなればまちに苦しい人が増えてしまうかもしれない。でも、親切にするとお互い笑顔になりまちに笑顔が増える。「親切」というのは人を笑顔にするものだと思う。私はそう思った。親切にするということは行動だけでしか表せないと思っただけ、言葉でも表せることを知った。だから自分もより多くの人に親切にしてあげたいと思った。

「親切で愛情あふれるまち」をつくるためには、親切にしてあげたいと思う人が増えれば、今よりもっと良いまちになると思う。他の人が親切にしているところを見て自分も笑顔にさせてあげたいと思う人が増

えれば、私はうれしい。

人は一言で変わる。私もそうだ。これからはもっと親切にし笑顔を届けたい。そんな人になりたい。それを実行し、たくさんの人に親切にしながら生きていきたい。

佳作

「もっと知りたい」

福島市立北信中学校

藤川 紗 弥

「矢野目地区の魅力を知ってもらうために手ぬぐいを製作しませんか。」

小学校六年生のとき、私たちのクラスでは、こんな企画が動いていた。

私は、矢野目小学校出身だ。矢野目小学校では、年に一度矢野目夏祭りというものが開かれる。

それを知った担任の先生が、

「矢野目の魅力を広めるチャンスじゃない。」

と言って、一枚の手ぬぐいを私たちにかかげて見せた。

その手ぬぐいは相馬市がまちをPRするために製作したものだった。それがすごく可愛くて、

「これを私たちも作ってみませんか。」

そう先生に言われたとき、やってみたいという思いでいっぱいだった。

私たちは、矢野目の魅力がたくさんあった手ぬぐいを製作することになった。

デザインを自分たちで考えたり、製作してくれる会社を探したりした。デザインを考える際には、地区のフィールドワークで学んだ歴史や三年生ごろに学習した矢野目の伝統工芸の知識などを活用しながら考えた。

デザインがなかなかまとまらなかったり、製作してくれる会社が見つからなかったりと大変だったが、矢野目夏祭りには、間に合わせる事ができた。

私たちは、完成した手ぬぐいを、「矢野目手ぬぐい」と名付けて矢野目夏祭りで販売した。大きな声で呼びかけたり、売りこみをしたりした。

売り切ることができたとき、みんなで跳びはねながら喜んだ。みんなと作り、みんなで売った思い出は、私にとってかけがえないものであり、他では味わえないような何かがあった。

〓教育と文化を尊び 〓希望に輝くまち〓

私は「矢野目手ぬぐい」を作ることで、自分の住む地域の魅力を再確認し、より深

く、知ることができた。

だから、私はこう思う。「矢野目手ぬぐい」を作った知った地域の魅力や伝統を、ずっと先までつないでいきたいと。

私は、未来の福島が、魅力でいっぱいのもちになっていてほしい。教育と文化を尊び、希望に輝くまちに、なっていてほしい。そんなまちをつくっていくために、私も、福島を知ることから始めたい。

もっと知りたい。私の大好きな、福島のこと。

佳作

「ピンクおじさんと

福島のみどり」

福島市立西信中学校

斉藤 乃生

部活動の帰り道に、お祭りで着るようなピンクの服を着たおじさんが向こうから歩いてきました。見た目で、「少し変わっていて、怖いな」と思いました。そのおじさんと通り過ぎた後、後ろをふり返ってみると、しゃがんでタバコの吸いぐらを取って、左手に持っていたゴミ袋に入れていました。おじさんのゴミ袋の中をよく見るとゴミがパンパンに入っていました。私は怖いなと思ったことが恥ずかしくなり、申し訳なく思いました。

家に帰った後、宿題をやっていたら、市民憲章の作文の宿題があり、きれいなみどりにしようということが書かれていて、ピンクおじさんがやっていたことは、こういうことに繋がっているのだなと思いました。しかし、おじさんはたくさんのゴミを

拾っていたのだから、取り組めていないと思います、残念に思いました。

そこで私の家や地域ではどのような取り組みがされているのか考えてみると、地域活動の中で年に四回くらいある、草むしりとゴミ拾いがありました。草むしりをしないと、生活に被害が出てしまうし、草がボーボーだったら見た目が悪いですし、市民憲章のきれいなみどりではなくなってしまう。だからこの取り組みは、未来の福島に繋がると考えています。

翌日も、部活動帰りにおばさんが植樹帯のいらぬ草を取っていました。私は、「こんなに暑い日に草むしりをするのだろうか」と思いました。次の日、同じ植樹帯のある道を通ったら、とてもきれいになっていて、清々しい気持ちになりました。あのおばさんはみんなに清々しい気持ちやよい気持ちになるとあの暑い中やってくれたのだと思いました。

でも私が見た人達は、ほとんどが高齢者でした。若い人が取り組んでいるのはあまり見ませんでした。私達、若者が私達より動けなかったり、体力がない人達ばかりに

まかせるのはよくないと思いました。

取り組みを考えてみたら、学校にある特設ボランティア部の活動も福島のためになる活動だなと思いました。

他にもきれいなみどりをするため取り組みとして、例えば、ゴミを無くすだけでなく、チューリップなどの花を育てる、などの町にみどりを増やす活動があることが分かりました。何かを植えることで空気も美味しくなるし、見た目も可愛いと思います。

これからの取り組みを市民が協力して行えば未来の福島もきれいな爽やかな市にできると思います。私もみどりの町づくりや市民憲章に協力していきたいと思います。

佳作

「親切」

福島市立大島中学校

佐藤 璃子

「勇気は、一瞬。後悔は、一生。」この言葉を知った時、私は昨年の旅行中のことを思い出しました。

昨年、私は家族と関西へ旅行に行きました。清水寺を散策している時、小学生くらいの女の子二人が道に迷っていました。私は家族といいましたが、私の家族は気がついていませんでした。声をかけようとしたけど、もし、私のかんちがいでは道に迷っていないかったらどうしようや、その女の子にめいわくがられたらどうしようと考えてしまい、声をかけられませんでした。そのまま、私は声をかけることができずに家族と移動してしまいました。少し前に福島駅の近くで困っている人がいた時、まわりにいた人がすぐに助けていました。私は、助けていたその人のように女の子を助けられませんでした。どう思っているのか分から

ず、不安に思ってしまったてすごく後悔しました。旅行に行っていたその日は、何度もある女の子のことを思い出して、もっとこうすればよかったと考えていました。

福島市内の人たちは、困っている人がいたら助けていてとても親切な人が多いと思います。毎日、通学路で安全に登校できるように見守っていただいたり、登校中にあいさつをしていただいたり、優しくしてもらい、他のところではなく、福島県に住んでいてよかったと心から思います。

自分たちの町を外側から見てみることで、福島市の人々の優しさや親切さをあらためて実感できました。旅行に行った時は、助けになれなかったけど、これからは私が優しくしてもらったことを別の人に返していきたいです。親切や気づかいは大切ですが、考えているだけでは伝わりません。声をかけたり、私にできないことなら、近くにいる大人の方に助けを求めたりと、行動に移さないとけません。思っているだけでは、だれも助けることができません。不安に思ってしまうこともあるけど、まずは

勇気を出して行動に移すようにしていきたいです。そんなふうに、親切な人が増えて、その輪が広がったら、福島市がもっと住みやすく、居心地のよい町になると思います。もっと福島市が良くなってほしいです。人と協力できて、笑顔があふれるような町を目指していきたいです。

佳作

「私のまちの元気なあいさつ」

福島市立大島中学校

横山 稀子

「おかえりなさい。」

この言葉は同じまちに住んでいる地域の方から登下校の時に言ってもらった言葉です。私はこの言葉にうれしいけど、何と返したらいいのが分からずいつもえしゃくで返しています。ですが、声をかけてもらうと温かい気持ちになります。

私が住んでいるこのまちは高れい者の方がたくさんいます。だから、家の周りを歩いて通っているだけでいろんな人に出会い、あいさつをします。すると、そのたびに何度も温かい気持ちになります。

今回、福島市民憲章の条文を読んでみて、三つ目の「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」の条文にこの気持ちがあてはまる気がしました。きっと、地域の方たちは子ども達に愛情を持ち、やさしく接してくれるから温かい気持ちになっていたん

だと思いました。

なにげない言葉だけど、そのあいさつでどんな良いことがあるか考えてみました。

一つは、地域の人に顔見知りが増え、もし災害などが発生してしまった時に声をかけ合って避難することができたり、犯罪が起きづらくなります。二つは、私達一人一人のコミュニケーション能力が向上したり、あいさつをするのが習慣になるとほかの地域に行った時にも、あいさつができて自分達の地域のイメージアップにもつながったりします。三つは、なにげないあいさつも声をかけてもらった時や、あいさつを返してもらえた時のうれしさや達成感もあります。

今は、あいさつを地域の人達がしてくれています。数年後に私も大人になってあいさつをする側になる時がきます。その時も、学校に行く子ども達に声をかける伝統のようなものを、続けていきたいです。そのために、今からあいさつをする習慣をつけたり、家族や友達にしっかりあいさつをするように呼びかけたりしてみたいです。そして、私が大人になった時、子ども達に

あいさつをしてもらうことで温かいうれしい気持ちになることを知ってもらい、次の世代の子ども達にもつなげていきたいです。

条文の「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」という目標を私たちのまちが達成できるのかは私たちがなにげないあいさつでも続けていけるのかにかかっていると思います。

佳作

「あたたかい福島」

福島市立平野中学校

関根 美徳

福島市には、「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。」という市民憲章があります。私は最近、この市民憲章を実感しました。

それは、学校帰りのことです。私はいつもの道を一人で帰っていると、畑で仕事をしているおじさんがいました。

「こんにちは！」

と私があいさつすると、

「こんにちは！」

とあいさつをかわしてくださいました。私はとても良い気持ちになり、うれしかったです。やっぱりあいさつって大事だなーと考えていると、

「ナスもつてくかい？」

と家族分のナスをくださいました。私はとてもうれしく、何度も

「ありがとうございます！」

といいました。そこで、やっぱり福島っていいなーと改めて思いました。

また、帰っていると中地域の方々が

「おかえりなさい！」

「おつかれさま！」

と話しかけてくださりとてもうれしい気持ちになりました。

このような出来事で、私は、福島のあたたかさを実感しました。これは地域の方々の人がらのよさだと思います。そして、市民憲章があることで、よりよいまちづくりに向かって進んでいけるのだと思います。一人一人が市民憲章を意識することで、笑顔いっぱい愛情あふれる住みよいまちになると思います。

そのために、私たちにできることはあると思います。自分から進んであいさつすることや誰にでも優しく、親切にするなど他にもたくさんあると思います。自分たちができることを見つけ、地域の一員として、あたたかい福島、誰もが住みやすい町になるように、今まで以上に地域の方々と関わり、自分ができることは、どんどん取り組んでいきます。私は地域の一員として、福

島市をより発展させられる存在になりたいです。

佳作

「福島市民憲章を知って」

福島市立野田中学校

鈴木 諒

学校の授業で、ぼくは福島市民憲章について知りました。その中でも、「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう。」というところに興味を持ちました。

ぼくのおじは東京都に住んでいます。おじは二十年前くらい前に福島市から東京都へ引っ越しました。当時、そのままの水道水を飲んでみると、まわりから驚かれたそうです。東京では、飲み水は買うことがふつうなのだそうです。今は浄水器を付けているそうです。

ぼくはのどが乾いたらいつでも水道水を飲みます。とてもおいしいと感じています。

水道水について母に聞いてみると、四、五年前までは水を買っていたというのです。おいしいのになんで使わないのかな？と疑問を持ったのでさらに聞いてみると、「東日本大震災」のえいきょうだと教えて

くれました。

東日本大震災については校外学習で何回か学んできました。地震で原子力発電所からたくさんの方々が放射能が放出され、そのえいきょうで食べ物や大気が汚染されてしまったということを学びました。そして、水も汚染されていたのです。だから、しばらくは飲まなかったのです。そのようなことは考えたことがありませんでした。安心安全な水を飲むことに感謝したいです。

その水道水がどこから来ているのかというと、山からです。福島市は盆地で、山にかこまれています。

小学生のとき、家族ですりかみ川ダムへ行きました。そのときにもらったパンフレットを見ると、「すりかみ川ダムのまわりは自然豊かな山に囲まれていて、山々から流れ出る水がとてもきれいだ」ということが書かれていました。みどりがたくさんあると水もおいしくなるし、いいことがたくさんあるなと思いました。

福島市の水はおいしいと言われています。しかし、理由はくわしくは分かりません。ぼくは、調べてみることにしました。

福島市の水道水は、厳しい検査をクリアし、市独自の検査もクリアしなければならぬので安全なのだそうです。さらに、「モンドセレクション」という品物を評価する機関で、十年連続で金賞以上を受賞しています。十年連続はとてすごいことだと思います。

福島市民憲章を知ったことで、今まで分からなかった市のみりょくなどについて知ることができました。これからも福島市民憲章を覚えておこうと思いました。

佳作

「私達は今、何をすべきだろう」

福島市立吾妻中学校

稲村 わかな

福島市がもっと住みよく快適で明るいまちにするため市民一人一人が心を合わせ、定められたのが福島市民憲章です。この市民憲章が定められてから五十一年。今の私達のまちはどうでしょうか。

私が住んでいる地域、庭坂は梨畑と田んぼが広がる自然豊かな場所です。ここに住む地域の方々も温かい人ばかりです。

例えば「行ったらっしやい」「おかえり」

「今日も暑いね」この言葉は私が登下校中に掛けてもらった心が温くなる言葉です。また、挨拶だけではなく他愛もない近所の方々との会話も私にとっては元気の元です。今日の天気の話や学校の話など、そんな何気ない会話でも私は一日が明るくなる気がします。

私はこのような日常の中の会話や挨拶など些細な事が市民憲章の「親切で愛情あふ

れるまち」をつくっていき、温かい笑顔の輪が地域全体に広がっていくのだろうと思いました。

中学生になり、小学校とは違う重いかばんを背負い、部活でくたくたになった帰り道で私は今日失敗してしまったことなどを考え、地面ばかり見ながら歩いていると、ふと鳥の鳴き声が聞こえてきました。何の鳥だろうと顔を上げると夕陽に照らされ、輝いている実りある田んぼが目に見え、心できました。その光景を見て私は思わず、

「綺麗」

と呟いてしまいました。周りを見回すと、袋がけされている梨畑、いつもはうるさいと思っていた虫の声も心地良い音に変わり、私はくたくただった足の事も忘れ、自然の美しさを改めて実感しました、このような景色も自然豊かな福島市ならではの光景なのだと思います。

ですが今、福島市は様々な問題を抱えています。その課題の一つになっている、私の住む地域の自慢である吾妻小富士の雪うさぎの近くの山、先達山にあるメガソーラーです。私はこの山を見ると果たして市

民憲章にある「空も水もきれいなみどりのまちづくり」なのかと疑問に思い、少し悲しくなります。ですが私はどんなに些細な行動でも勇気ある行動が周囲の意識を変える事があると思います。その行動の輪が校内や地域、福島市で広がっていけば、きっと福島市民憲章の条文のように福島市はより住みよく快適で明るいまちに発展していくだろうと思います。

そんな希望あふれるまちにするため、私達は今、何をすべきだろう……、そんな心をもって生活していきたいです。

佳作

「あいさつから始まる優しい町」

福島大学附属中学校

小針 茉子

私が住む福島市には市民憲章というものが定められています。言葉から、難しそうだと思っていましたが、内容をよく読んでみると実は自分たちの生活に密接に結びついているものだなと感じました。

私が通っていた三河台小学校では、小学校の近くの横断歩道で小学生の登校を見守ってくれている方々がいました。晴れている日だけでなく、雨の日も雪の日も毎日欠かさず私たち小学生や他の地域の方々にもあいさつをしながら、小学生が安全に登校できるようにと立ってくれていました。私が、今日は苦手な教科があるから学校に行きたくないと思うような足取りの重い日でも、学校が近づいてきてその方たちから

「おはよう。」

と言われると、気持ちがいしゃきつとして、

今日も頑張ろうと思えました。小学一年生の頃は、親がいないところで自分たちが歩くことに慣れておらず最初は不安もありましたが、地域の方々が横断歩道であいさつをしてくれて、また安全に登校できるように見守ってくれておりホッとしたのを覚えています。高学年になると、自分の家族や身近な人のためだけでなく、地域の人のために大切な時間を使ってくれているその方々の気持ちがありがたいと感じるようになりました。

また三河台小学校にはあいさつ運動というものがありました。あいさつ運動とは、六年生が下級生に朝、校舎のいろいろな場所ですべてあいさつをするというものです。はじめの頃、私は

「知らない人にあいさつするのは恥ずかしいな。」

と思っていました。しかし、友達と一緒に先生や下級生に

「おはようございます。」

という、元気なあいさつを返してくれる人がたくさんいて、とてもうれしい気持ちになりました。以前から、両親にあいさつ

が大事であると言われていましたが、なぜそんなに大切なのかと思ったときもありました。しかし自分があいさつをする立場になり、あいさつはやはり人とのコミュニケーションの始まりとなる重要なものなのだなと感じました。

「親切で愛情あふれるまち」「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」市民憲章という言葉や中身を知らなくても、私は小学校での活動や、地域の方からこれらの内容を自然と学んでいたことを知り、そこが福島市が素晴らしい場所である証拠だと思いました。

私も中学生になり、以前よりもできるところが増えてきたように思います。福島市の一員である自覚を持ち、この福島市をさらに愛情あふれる場所にできるように過ごしていきたいです。

令和 6 年 度
福島市民憲章作文コンクール
一 般 の 部



市の花 モモ

目次

◆金賞

福島市が好きですか？

ペンネーム 福島 Y U K I …………… 1

◆銀賞

福島市民憲章について

ペンネーム 焼きサバ塩定食 …………… 2

伸ばそう！市民憲章の芽々古閑裕而のまちで

菅野 結 夏 …………… 3

◆銅賞

福島市民憲章に気づくこのまちの良さ

相澤 明 美 …………… 4

ごみ問題に対峙する方法とは

黒澤 政 子 …………… 5

市民憲章と私

富田 清 子 …………… 6

金賞

「福島市が好きですか？」

ペンネーム

福島 Y U K I
ふくしま ゆき

「福島市が好きですか？」と聞かれたら、私は迷わず「はい。」と答える。まず名前が好き。「福」の島。幸福がたくさん詰まった島。こんなに素敵なネーミングを考えた先人はすごい。名前のとおり、福島市にはたくさん「福」がある。

例えば、私の休日の朝一番の楽しみは、新鮮な野菜や果物を、直売所や無人販売、道の駅に買いに行くこと。採りたてのみずみずしい野菜や果物達が、生産者の名前とともにここぞとばかりに並んでいる。どれもすごく美味しそうで、何を買おう、何を作ろうかとわくわくする。福島市自慢の豊かな自然の産物。美しい空の下、美味しい空気と水、大地からの贈り物だ。

他のお客様達も、「緑がきれい」「もう旬だね」「そろそろ桃も食べ納め」なんて言いながら買い物かごにお目当ての野菜達を

詰めている。ご夫婦で仲良く買い物をして、見る方や、ご年配の方に通路を譲る方もいて、見ていてほのぼのする。食べ方や保存方法を生産者やお店の方にきいている人も、販売している方も親切に教えて下さり、レシピをつけて下さる時もある。人と人との触れ合いがとても素敵で、何よりも自分が売っている物に自信があるのがわかる。私も、いつも安心して安全だと思って食べている。「これって福島への愛だな、信頼だな。」と私は思う。おいしくって温かい「ふくしま」の味。

二〇一一年の震災の後、しばらくは空を見ることも木や花を見ることも怖かった。当たり前のように目の前にある、今、福島を自然を享受するこの幸せは、大変な苦労を一つ一つ乗り越えてきたのだと思うと、胸が、目が、熱くなる。

きれいなみどり、文化を愛し、未来への希望に輝く、思いやりにあふれ、親切で、互いにきまりを守り、楽しく働ける、いろいろな世代が生きがいをもって過ごせるまち。福島市民憲章に掲げられていることは、「当たり前」のことではない。一つ一つを

みんなが心に刻んで守っていこうとしない
と続かないことだ。

「ふくしま」と発音すると、「ま」から口を閉じるまで、ひかえめだが優しい表情になること、「ふくしまし」まで言う、最後ににっこりした笑顔になることを皆さんは知っていますか。ぜひ、試してみてください。

一番大切なのは、互いに尊重しあい、温かい心でいること。大切なこの福島を、市民みんなで守っていききたいと思う。

銀賞

「福島市民憲章について」

ペンネーム

焼きサバ塩定食

今回、作文コンクールに参加させて頂くのは三回目。

福島市民憲章の言葉ひとつひとつを、改めて見ようと思った。そういえば、私はこれを昔、どこかで見たことがある。しばらく考えて、考えて、思い出した。私の母校、庭塚小学校だ。

私は放送委員会で毎日職員室に通っていた。先生が放送室の鍵を持って来るまでの数十秒、校長室の掲示板を眺めて待っていた記憶が蘇る。掲示板に六年間ずっと掲示されていたのが、この市民憲章だった。

その当時、庭塚小学校には全員が周知しているような校則がなく、先生に注意されない中なら、ある程度自由な学校生活を送っていた。しかし、今思うと、市民憲章に書いてあることが、私たちが誇れる素晴らしい校則だったのかもしれない。

というのは、庭塚小学校には何か行事があるたびに地域の方との交流や、地域について学びを深める学習が組み込まれていた。春には地域の方に教えて頂きながら野菜やイモを植え、夏には庭塚地区伝統の焼き物をみんなで体験する、秋には地域の方を招待し、校庭に大きな穴を掘って焼き芋大会、冬には地域の方と一緒に滑るスキー教室がある。授業では、学校の外に出て地域を探検する学習も一年間に何回も行った。本当に素晴らしい学びでいっぱい的一年間だった。

私の小学校時代には家庭環境が複雑な子や、児童養護施設の子、知的・身体障がいのある子も多くいたが、誰が特別扱いされる訳でもなく、みんな平等に、心豊かな時間を過ごしたという記憶がある。それは先生方はじめ地域の方、保護者の方、たくさんの方々に支えられて、見守られていたということを、社会人となった今、痛感している。

私のかつての帰路、毎日一時間弱歩いた通学路だが、今、見上げると目に映る景色は、今はあの「ハゲヤマ」だ。私はあのハ

ゲヤマを初めて見たとき、心がキュツとなった。そして中合、イトーヨーカドーなど思い出の地は次々と消えてしまった。栄枯盛衰、という表現がいいのか分からないが、時間、そして時代は流動的だ。割り切ったつもりでいても、パズルのピースをうっかり一つ無くしてしまい、見つからなかった、そのような寂しい気持ちを持っている。利便性・経済的な豊かさを求めつつ、どこか私の心の中に根ざしている、あたたかな福島市の人の心、福島市の情景を求めている。変わっていく故郷、それでも「ここにいたい」と思う。

市民憲章を制定しようと奮闘された方々に想いを馳せ、福島市民として、故郷に根ざす人間として私は何ができるだろうか。

銀賞

「伸ばそう！市民憲章の芽

～古関裕而のまちで～」

菅野結夏

「ママ、今日はお歌の練習楽しみだね！」
出かける準備をする私に、三歳の娘が声をかける。持ち物は沢山の楽譜と、子ども向けのお楽しみグッズ。それらを見ただけで、これから何をしにいくのか娘には分かっってしまうようだ。

私は福島市内の女声合唱団に所属し、月に数回合唱の練習をしている。団のモットーは「無理はせず大人も子どもも楽しく歌う」。二十代から三十代のメンバーが中心なので、当然子育て真っ最中のメンバーも多い。時には演奏会に向けて子どもと一緒に練習できる歌をプログラムに入れよう、とか、子ども達の間で感染症が大流行しているから練習日を変更しよう、なんてこともしょっちゅうだ。

練習場所に着いたらお楽しみグッズを広げ、ちょっとしたキッズスペースをつくる。

そして練習スタート。発声練習を始めると、おもちやで遊んでいる子ども達も自然と体を揺らしたり、真似をして歌ったりしてくれる。

発声練習が終わると曲の練習。ここ最近特に練習しているのは、古関裕而先生作曲の「紺碧の空」だ。音や強弱の確認をし、声の質を合わせて歌えるよう練習するのだが、何を隠そうこの曲が娘の大のお気に入り。歌の最後に差し掛かると「早稲田、早稲田。」「覇者、覇者、早稲田！」と大きな声で必ず歌ってくれる。歌詞の語呂の良さと、古関メロディならではの旋律が、娘にとって頭に残りやすいのかもしれない。古関メロディの中で子ども達に人気の曲は他にもあり、「栄冠は君に輝く」「高原列車は行く」などの代表的な曲から「今日はよい日」などの知られざる名曲まで様々だ。世代を超え、今を生きる子ども達の心に響く古関メロディの力は偉大であると、練習のたびに実感している。

私が生まれ育ち、親となった今も家族と共に暮らし続けている福島市。この福島市が市民にとって「住みよく豊かなまち」と

なっていくよう、五十一年前に制定されたのが市民憲章だ。教育と文化を尊ぶ大切さ。親切で愛情あふれるまちづくり。市民の精神的なよりどころとして、市民憲章は長きに渡りこの福島の地に根付いてきた。

ふと考えると、私が今取り組んでいる活動の根っこは市民憲章にあるのではない。合唱団と聞くと「沢山練習しなくてはならない」「小さい子どもと一緒にでは難しい」というイメージがよくもたれる。それなら、一人ひとりの家庭生活を大事にし、子どもと一緒に楽しむことのできる合唱団を目指そう。そして福島市ゆかりの作曲家である古関裕而先生の楽曲を歌い繋いでいこう。私は誰に教えられるでもなく、自然にこのような思いをもつことができた。それはひとえに、私が生まれる前から連綿と受け継がれてきたこの市民憲章のおかげなのかもしれない。

仲間と共に歌いながら見える、娘の笑顔。もう市民憲章の芽が見えているな、と感じる。これからもその芽が絶えることなく、ぐんぐんと成長し続けることを願っている。

銅賞

「福島市民憲章に気づく」

このまちの良さ

相澤 明 美

福島市民憲章の五項を読み、ふと思い出したのは昨年の六月、アメリカに住む友人が子どもを連れて我が家に訪れた時のことだ。

東京生まれでアメリカ人の男性と結婚した友人は、現在ジョージア州に住んでいる。彼女は大学時代の級友で、好物は桃。これまで食べた中で一番おいしかった桃は、私の実家から送った福島市産のあかつき桃だと何度も言ってくれていた。アメリカの現在の家に引っ越した折にも「ジョージア州は桃の州と言われている、特に私の住むピーチトリシティは桃の一大産地なの！でも私にとっては明美に送ってもらった福島の桃が一番なのは変わらないわ！」と話していた。そういった言葉を聞くたび「福島の桃を空輸できないのが残念」と悩ましく思うのである。

そんな彼女から昨年「六月から二カ月間日本に帰るから、息子を連れて福島に遊びに行ってもいい？」と連絡が入り、二つ返事で、「もちろん！」と返した。新型コロナウイルスの流行などもあり、彼女と会うのはお互いの子どもが赤ちゃんだった頃以来だ。そして、彼女にとっては初めての福島旅行である。どこに連れて行こう。楽しんでくれるだろうか。

心配は杞憂だった。桃の季節には早かったため、さくらんぼ狩りに連れて行つた。そして、あづま総合運動公園の屋外アスレチックを楽しみ、道の駅ふくしまで吾妻山の雪うさぎをモチーフにしたソフトクリームを食べ、併設の屋内遊び場で再び身体を動かした。

一番面白かったのは、さくらんぼ狩りを気に入った友人の息子が「オイシイ！」とたくさんのおくらんぼを頬張り、宇都宮からの観光バスから降りてきた人達に向って「僕が福島のさくらんぼ一番食べたよー!!」と種を入れた紙カップを掲げて見せたことだ。彼はハーフながら見た目は白人。しかし上手な日本語でさくらんぼを絶賛してい

て、観光客の皆さんはその微笑ましい姿に大笑い。「よかったね!」「どこの国から来たのかな?日本語上手だね!」と声を掛けられていた。

帰り際に友人が、「自然の中で子ども達が安心して遊べる福島市はいいところだね!新幹線から見えた山に囲まれている景色も最高。さくらんぼ農家の人も優しく、明美の家族もおもてなししてくれた。明美ももっとSNSで福島市のPRをしよう!!控え目では、良さが伝わらないよ」と言っていた。その言葉を聞き、それまで当たり前のことで気づけなかった「福島市の良さ」について、じんわりと体に馴染むように感じられた。

話は市民憲章に戻るが、挙げられている五項は「いま。当たり前のようにある福島の良さ」を文面化し、市民に向けて気づかせてくれるものなのだ。市民憲章に誇りを持ち、これからも家族と共にこのまちで暮らしていきたい。

銅賞

「ごみ問題に対峙する方法とは」

黒澤 政子

福島市は、ごみの量が全国ワースト上位に入るという不名誉な看板を背負っている、もちろん、市の広報誌や町内会クリーン作戦等で工夫していると思う。

ごみの量だけでなく、私の住む笹木野を見渡せば、ポイ捨てのなんと多いことか。高速道路の側道で人家が少ないせいか、ペットボトル、空き缶、たばこの吸い殻、マスク、食べ残し、空パック、犬の糞等のごみが散乱。

側溝や溜枥には、たまった大量の笹や様々なごみの堆積物。大きな物では、エアコン室外機。これまで見つけたごみは、ごみバサミと可燃不燃それぞれ袋を準備して拾っていた。

しかし、1m四方の溜枥の中は素人には難しいし、エアコン室外機もしかり。支所に連絡相談すると、その日のうちに点検に来て、出来るところは処理していった。テ

レビ番組の『すぐやる課』に近い仕事ぶりに感動した。もっと市の広報誌や公共の電波を活用して、仕事内容をアピールしてもよいのではないだろうか。

私は、同じ内容のごみが段ボールやレジ袋に入って、毎週少しずつ場所を変えて捨てられていることに気づいた。このことから、同じ人が、決められた場所までもっていくのが面倒くさいと思って、人目のない時間や場所にごみを捨てているのではないかと推測される。捨てられたごみを野生生物が食い散らかしたり、側溝から海まで流されていたりすることを、その人は知っているのだろうか？

私のごみ問題への手立ては、敷地の早めの草刈り、支柱に夜光反射テープや造花や風車つけ、道路沿いの窓にポスターやステンドグラスに似せた飾りつけをして、ゴミ捨てられないきれいな道路にしておくことだ。それでも、心無い人からポイ捨てされるが、できるだけ早くごみを拾っておく。まさにイタチごっこだが、いつかは諦めてポイ捨てせず、決められた場所と曜日に捨ててもらいたいという気持ちで拾っている。

る。

以前、神社の鳥居を模して道路沿いに設置したら、ゴミ捨てが無くなったという話を聞いたこともある。周辺をきれいにしたことや神様に見られているという心理が働いたせいかな？また、支所の担当者と話しているとき、家の周辺を草刈りしておくとな手が入っていると思い、ゴミ捨てが少ないようだと言われた。

現在のごみ問題は、「自分の居場所は汚したくない・早く捨てたい・自分だけならわからない」という人の弱い心に強く関わっていると感じた。人の目があり、人の手がいつも入っていると思わせる環境作りを、今後も工夫継続していくことが大切だと思う。

銅賞

「市民憲章と私」

富田 清子

私が市民憲章を認識したのは、恥ずかしながら定年退職してボランティアなどの団体と関わりを持つようになってからです。交通安全母の会や女団連の総会等で皆と唱和し五つの項目があることを知りました。

この憲章が制定されたのは、今から五十一年前、私が二十才の時で当時福島的大学生でした。長い歴史があるのですね。太平洋を見て育った私は、夏はむしろ暑く、冬は厳しい寒さの盆地の気候に耐えきれず、休みになると生まれ故郷の原町（現南相馬市）に逃げ帰っていたものです。そんな私が縁あって福島の人となり、背の低い阿武隈高地のかわりに雄大な吾妻連峰を眺めながら暮らしています。雪の吾妻小富士は絶景で、雪解けの頃に現れる雪うさぎは季節の移ろいを感じさせてくれ大好きです。また、そばを流れる荒川は、日本一の水質を誇り、十年以上も続いています。ま

さに、「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう。」という憲章の一項目が実践されてきた証しなのではないでしょうか。

しかし、最近、その景色に異変が生じました。太陽光パネルを取りつけるため、山の中腹が大きく削り取られてしまったからです。私たちの生活に電気は欠かせないものです。そのための措置だったのでしょうが、自然景観をそこねたうえ、想定外の雨が降った時の土砂災害が心配です。ウォーキングをしていると荒れた土地がそのままになっている場所をたくさん見かけます。そのようなところを有効活用することはできなかつたのでしょうか。自然をそこねないように生活を高めていく必要性を感じます。

憲章第二項目は、「教育と文化を尊び希望に輝くまちをつくりましょう。」となっています。毎年秋に民家園で地元の歴史にちなんだ劇を見せてくれる劇団があります。旧広瀬座や旧馬場家でしてくれいますが、地元の中学生も出演させてくれ、演劇に対する興味・関心をそそるような演出

をしてれています。実際、何年か後にその道に進む生徒さんも出てきています。また、私たちは地域の歴史を知る一助ともなり、今年はどんな演劇を見せてくれるのだろうか。楽しみに待つのです。



市の鳥 シジュウカラ



市の鳥
シジュウカラ



昭和48年4月1日制定 福島市



市の木
ケヤキ

市の花
モモ

わたくしたちは、みどりにつつまれた信夫山と清い流れの阿武隈川をもつ福島市民です。
福島市は、地味豊かなしのぶの里に古くから開けた人情の美しいまちです。
わたくしたちは、平和で、さらに住みよく希望にみちた
まちをつくるためこの市民憲章をさだめます。

子どもから高齢者まで
安全で健康なまちをつくらせよう

力をあわせて
まちをつくりましよう

親切で愛情あふれる
まちをつくりましよう

教育と文化を尊び希望に
輝くまちをつくりましよう

空も水もきれいなみどりの
まちをつくりましよう